
Ships and Stars

夜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S h i p s a n d S t a r s

【Nコード】

N 8 6 1 1 I

【作者名】

夜

【あらすじ】

「知ってるか、L a d y？ 雨が降るから悲しいんじゃない。お前が悲しむから、雨が降るんだ。」

彼の言葉は、アスファルトに染みる雨の様に、私の心の奥底に優しく染み込んでいった。

キーワードに苦手な単語を発見した方は速やかに退席願います。

1st Ladies and Gentlemen

——暗い。

その一言に尽きるその室内には、煙草の匂いしか漂っていない。生活感というものがおおよそ感じられないこの部屋には、ベットが一つと、適当なガラステーブル、そこに乗せられた携帯電話が有るのみ。いや、随分と渋い匂いの根源、吸い殻が溜まりに溜まった灰皿も有る。

窓からは月を眺める事も、星を眺める事も出来ない。今宵は生憎の曇り空故。

そんな良く言えば簡素、悪く言えば不気味な部屋の住人は、ベットで横になり、宙へと霞む煙草の煙を眼で追っていた。

住人はこの静かな時間が好きだった。血生臭い殺しから下らない私怨の殺し、とある国を守る為の殺し。そういった人外の喧騒から離れる事の出来る時間、即ちこの部屋で過ごす時間は魅力的で愛すべきモノ。

——静寂を壊さんと携帯電話が不意に鳴った。

ゆっくりと至極怠そうにテーブルに無造作に寄せられた携帯電話をまさぐり取り、ゆっくりと、やはり至極怠そうに電話に出た住人。

「……………俺だ」

たつぷり一拍。その一拍で相手には住人の気持ちさが真摯に伝わった筈だ。怠いという形容詞が一番に似合う感情がだ。

「久し振りじゃの、ブレイズ。元気にしておったか？」

ブレイズ——それは住人の名。焰を関するその名は暗い部屋を明るく照らす事はないが、暗殺という生業ではまばゆいばかりに光を放つ。

「時間を考えろ、爺。知ってるか？ 全世界が日本の標準時間で回ってると思うなよ？」

「すまんの。何せ、急ぎの用だったもんじゃて」

ブレイズの皮肉、いや悪態にも動じず、スムーズに自分の流れへ彼を引き込もうとする話術に彼は頭を抱えた。

こんな時間にこんな奴から掛かる電話はろくな話じゃない、彼の長年の経験からそれは直ぐに理解出来た。

「魔帆良に来てくれんか？ 頼みずらい事じゃが、お主しか頼める者がおらんのじゃよ」

——馬鹿か。俺以外の奴に頼む気が無えただけだろうが。

喉まで出かかった言葉を寸前で飲み込んだ自分をブレイズは褒めたくなつた。

新たな煙草に火を点け、ゆっくりと吸い込んだ煙を溜息混じりに吐き出すと同時に、彼は仕方が無いと相手へと尋ねた。

「何時、行けばいいんだ？」

「——フォッフォッ。明日の朝一にでも、勿論日本時間じゃ」

「……………転移魔法を使うからな」

もう少し、もう少しだけ、歳老いた人生の大先輩を労る気持ちを
持ってもいいのでは、とブレイズの電話の相手は思うが決して言う
事は無い。

これが普通の彼で、彼はなんだかんだ言って相手を思いやれる優
しい心を確か持っている認識しているからだ、多分。尚且つ彼が
優しさに溢れた言葉を投げ掛けてこようものならそれは正しく青天
霹靂。人類は、この星は、宇宙は、神の掌の上で握り潰されるだろ
う。

——では、またの。

呑気な声を数千km離れた此处で聞く事になると思っていなかつ
たブレイズは煙草を揉み消し、闇に浮かぶ様にそこにある天井を見
詰めた後、ゆっくりと瞼を閉じた。

「嗚呼……魔帆良……魔帆良？　アイツが居るじゃねえか」

久し振りに瞼の裏に思い出した”彼女”は、照準を自分にしっか
りと合わせ、指は引き金に掛かっていた。脳裏に響く銃声を子守唄
に、ブレイズは眠る。

——銃声が響く。

それは決して猟銃だとか競技用の物ではない。そもそも狙った相
手が違う。的でも動物ではない。それは悪魔、強いて言うなれば異
形のモノ。

「刹那、こっちは終わったぞ」

銃口を逸らし、スコープに隠れていたその瞳は、酷く力強い光を
宿していた。だが、その光は、輝いてはいない。

透き通る様に長い黒髪が風に靡く。月の出ていない今宵、その黒髪は闇に溶けて見え、幻想的なものに感じられた。

「こつちもだ。今日はもう終わりだな」

刹那——そう呼ばれた少女はその背丈に不釣り合いな野太刀を抱えてやって来た。

「龍宮？ 空なんて見上げてどうしたんだ？」

龍宮と呼ばれた少女と呼ぶには些か失礼かもしれない少女は、銃を抱え、細めた眼で夜空を見上げていた。生憎、雲のせいで月を拝む事は叶わない。

しかしその眼差しは月ではなく、何かを捉えていた。

「いや、なあに。知り合いを思い出したんだ」

軽く笑いを零し、龍宮は行くぞと刹那を促した。刹那は一度首を可愛く傾げた後、龍宮の後をゆっくりと追った。その足取りは確かなものだ。

「……昔の、大事な知り合いを、ね」

紡がれた言葉は、やや冷えた風に優しく吹かれた。

刹那は龍宮の後を歩いていた為に見る事は叶わない。彼女の優しい眼差しを。見られなくてよかったと、彼女は小さな安堵の溜息を、心の中で人知れず零したのだった。

.

2nd Well / Always . . .

——最悪だろ。

ブレイズは一人愚痴を零した。額に手を当て俯いている為に表情を窺う事は出来ないが、溜息を吐いている当たり、気分は落ちてしまっているのだろう。

未だ春とは言え、朝は中々に肌寒く。空気はいい具合に澄み、深呼吸をすれば肺一杯に桜を取り入れる事が出来る。

だがブレイズは二酸化炭素を延々と吐き続ける。それも多分に濃いものだ。

「結界なんて聞いてねえぞ。それよりもだ、何で朝からお前に会わなきゃいけないんだよ——タカミチ」

ブレイズの後ろに気配も無く現れた——つもりだったのはタカミチと呼ばれた眼鏡を装備した渋い男。頬を軽く搔きながら苦笑を零すその様も、中々絵になるのだから不思議なものだ。

「いや、僕に言わせれば何故ブレイズさんが此処に居るか分からないですけど。行方不明だった筈では……それにあの頃のままだ」

「そいつは……今は内緒だ。楽しみは後に取っとくもんだぜ？ それよりも近衛は何処だ？ 俺はアイツに呼ばれたんだ」

ブレイズの言葉にタカミチはああ、と頷き、学園長室へ案内をしようとして彼に近付いたのだが、残念ながらそれは出来なかった。

「——おっと」

突如現れた少女、いや、少女と言うにはやや機械的な何かがブレイズへと突っ込んだ。彼は腹部を狙った掌底を捌き、その腕を掴みながら足払いを掛けてそれを拘束した。

「タカミチ、此処は随分と物騒だ。命が幾つあっても足りん。俺は帰る、よ……？」

「——ブ、ブレイズ、なのか？」

やれやれとタカミチだけを視界に捉えた筈だったブレイズの網膜には、金髪の少女をも捉えてしまった。その少女はブレイズを指差し、彼の名前を呟き止まる。

「ブレイズ？ 知らないなあ。俺は帰るよ。それじゃッ——！」

拘束していたモノを離し、何も知らないと装って後ろに振り向いたブレイズ。だが、足を踏み出そうとした瞬間、首元にはか細い腕が巻かれていた。そして腕だけではなく、気付けば首にかかる吐息に彼は完全に足を止めた。

「離せ、重い、苦しい、馬鹿、阿呆」

「——馬鹿者！ 一体どれ程この私が心配をしたのか貴様は分かるのか？！」

涙目をその小さな清い雪程も隠そうとせず抱き着く彼女を、流石

にブレイズも邪険に扱う事が出来ず、彼女のしたいようにさせた。
タカミチは苦笑いを浮かべ煙草に火を点ける。

——昔を思い出すなあ。

ゆらゆらと揺れる煙の向こう側には自分が幼き日に見た思い出に
近い景色が広がっていた。何時も自分勝手なブレイズ、そんな彼に
やたらと絡むのは決まって少女——エヴァだった。

もう少しと、タカミチは懐かしい空気に浸りたかったが、学園長
の元へブレイズを送り届けなければならない為に、苦笑を消してほ
んの少しだけ暖かくなった空気に笑みを贈る。

「エヴァ、そろそろブレイズさんから離れてくれないかな？ 学園
長室に行かなきゃならないんだ」

「……仕方ない、私も言つてやろう」

「——仕方ねえから、馬鹿も連れてってやる。だから胸を張るな、
背伸びすんな。何れ成長するさ」

ブレイズを離し、可愛い胸を張って答えたエヴァに彼は至つ
て真顔で毒を吐く。彼女は一度自分の胸をその瞳で確認し、彼へ視
線を向けた。言わずもがな、睨みを効かせているのだが、彼女は反
論等といった事は一切口にしない。経験から彼に何を言っても結局
は自分が言い負かせられる事を知っているからだ。

「さあ、行きますか」

「……怠いが、な」

至極怠そつに煙草を吸い始めたブレイズに、タカミチは笑みを零
す。

彼の吐き出す有毒極まりない煙に、やはりか昔を思い出す。彼が格好よく煙草を吸うその姿に、少し懂れていた事を。そして決まってブラックコーヒーを飲んでいた事も。眠気覚ましに自分も飲もうか、と考えている当たり、タカミチは若干彼の影響”も”受けているに違いない。そしてタカミチは一人、また昔を思い出すに違いなかった。

「よお、久しいな。だが無駄話は嫌いだ。用件だけ聞いてやる」

「お主は何時もそうじゃ……それよりも先ず、今まで何をしていたか聞かせて欲しいんじゃない」

学園長の尤もな言葉にエヴァとタカミチは首を小さく縦に振った。生憎その動きが視界に入ってしまったブレイズは、溜息を零した。

「オイオイ。そんな話は何時でも出来る……先ずは用件だ」

早く言えとブレイズの視線は訴えていた。簡単に言うなれば籠められていたのは怒気。話したくないのではなく、今はまだ触れるべきではない治りかけの傷痕に、学園長は大人しく用件を話す。

「なに、簡単な事じゃて。この学園を守り、木乃香を守り、ネギ君をサポートして欲しいんじゃない」

「……先ずは固有名詞を止めろ、それと具体的に話せ、理由も。そして敢えて言わせて貰おう。お前は馬鹿か」

——何が簡単なんだ、馬鹿が。

学園を守る。学園長のその言葉がブレイズの喉元に魚の骨の様に引っ掛かる。

結界もある、タカミチも居る、エヴァも居る、具体的な数は分か

らないが他にも魔法使いはまだ居るだろう。ブレイズはまだ学園の規模を把握していないが、概ね予想は出来ていた。人手が足りない時もあるだろうが、結界も張ってあるのだ。何かが襲ってきたとしても適材適所、Case By Caseで乗り切れるだろう。

次に木乃香を守る。その名を持つ人間が誰なのかは彼は勿論知らないが、最も拒否したいものだ。何しろ今まで誰かを守るなどというボディーガードの真似事などした試しがないから。さらに言えば守って欲しいと言うあたり、何か重要な物を握っているか、戦う力が皆無か。若しくはどちらもか。何れにしる彼にとってみれば厄介極まりない依頼。

そして最後にネギという人間のサポート。拒否する理由は彼には無い。だがしかし、強いて言うなれば嫌な予感がした、と。何とも馬鹿臭い理由だ。

「スマンの。木乃香は驚の孫じゃて。その身の内には膨大な魔力が眠っておつての。それを悪用しようとする者が居らんとも言い切れないのじゃ……故に守って頂きたい、アイテール殿」

「A i t h e r……そう呼ばれるのは何時以来だ」

アイテールと呟いたタカミチはブレイズを見詰めた。

—— A i t h e r B L A Z E。彼がまだ幼かったあの日。その名は世界を駆け巡った。サウザンドマスターに勝るとも劣らないその名。天空の原初神、アイテールの名を頂戴した焔。上天の光明とは上手く言ったものだ。とブレイズの仲間はよく言っていたのをタカミチは未だに忘れてはいない。

「フン。エレボスが良いと何時も言っているだろうが」

そして決まってエヴァは言う。闇、冥福のエレボスにしろ、と。

それはきつと自分が闇の福音という二つ名を頂戴したからだろう。
結局はブレイズと一緒になら何だっていいのだ、彼女は。

自分に昔を思い出す癖があったのかと、感慨深く老けた顔のタカミチは鼻を何となしに擦った。

（けど何だかんだ言っても、ブレイズさんは断るつもりはないだろう。BLAZE、だからね）

闇に浮かぶ一筋の光。光源は何時だってブレイズだった。縋りたくなる程の暖かさを持ち、神の怒りを代弁するかの様に荒々しく猛る。名は体を表すとは正にこの事と、タカミチの思い出の中で武器をやたらに扱う男は笑って言っていた。

そしてタカミチは漸く気付いた。随分と老けたが、ブレイズが居ると自分は幼いままだと。そしていい加減新しい癖を本気でどうしようか、と真剣に考えたのだった。

3rd(前書き)

真逆、即ち真理、依って中途半端故に投稿。苦情等は御勘弁を。

「――これから、と言っても今年度も残り僅かだが宜しく頼む」

そう言つてブレイズは静かに頭を下げた。隣で見詰めるタカミチは笑っていた。表情には出ていないものの、頬の筋肉がほんの少し痙攣したのをブレイズは見逃さなかった。

何時もは騒がしいこのクラス――2-Aも今日に限つて言えば些か落ち着いていた。ヒソヒソと耳打ちをする者も居れば我関せずとばかりに明後日を向く者など。

春は幾分か先のこの寒い時期に、まさか新任の教師が赴任するとは誰一人として考えていなかっただろう。

「自己紹介はここまでにして、授業を始めるぞ」

何時の間にか居なくなつたタカミチをさして気にする事なく、ブレイズは英語の教科書を緩慢な動作で開いたのだった。

「それにしても、あのブレイズさんが真面目に授業をする様子を見たら、あの人達は何て言いますかね？」

「笑い死にだ。それが俺が仕留めるか、だな」

時刻は夜。やはりこの時期の夜風は身に染みるせいか、スーツに

コートを羽織り、気怠そうにブレイズは言い放った。隣に並んで歩くタカミチはブレイズの先生振りを思い出しか、頬を緩ませ笑っている。

それに舌打ちを零し、ブレイズは尚も愚痴る。

「この糞寒い中世界樹広場に集合だと？ ふざけやがって……」

ブレイズの零した溜息は白く染まる。至極怠そうなブレイズを察してか、昔の貴方なら行かないでしょうね、とはタカミチは言わない。言ったら何をされるか分からないからだ。

二人で並んで歩いた先には世界樹が己の存在をこの世界に主張していた。地に住まう命在るモノが平伏してしまう程に、その神々しさはこの夜に酷く輝いていた。

「お主は時間厳守という言葉の意味が分かんのか」

「煩い、黙れ、爺。来てやっただけ有り難いとは思えないのか、糞」

響いた学園長の声に、見事なまでの悪態をつく者は学園広しと言えど、ブレイズを於いて他に居ないだろう。

「今夜はお主を紹介する為に殆どの魔法関係者に集まって貰ったのじゃ。自己紹介、宜しく頼むぞ……」

ブレイズの悪態を華麗に受け流し、学園長は告げた後、笑いながら髭を撫でた。

ブレイズは諦めの箸った溜息を盛大に吐き出し、胸ポケットにしまい込んだ煙草を取り出し火を点けた。そしてその有害極まる煙を吐きながら詰まらなそうに言葉を紡ぐ。

「ブレイズ・イエーガーだ……宜しく頼む」

ブレイズの名に魔法関係者はざわめいた。

——大戦の英雄が何故此处に？

そのざわめきにブレイズの眉間には皺が寄る。

マギステル・マギが、正義の魔法使いが——様々な言葉が飛び交うこの場に、彼の苛立ちが収まる気配は無い。その様子を些か宜しくないと感じた学園長の一声で、此处は本来在るべき夜の姿へと戻った。

「すまないのう。今夜集まって貰ったのは彼の大戦の英雄が魔帆良学園の教師に赴任した事を伝えたくてこの手段を取らせて貰ったんじゃ。色々聞きたい事は多々あるとは思うが、今夜はこれにて解散とする。何かあるならば本人に直接聞いてみるといういぞい——では、解散じゃ」

学園長の一言で散り散りになる魔法関係者。中々多いその数に些か驚いたブレイズではあったが、それを表情には出さない。

魔法関係者が消えたこの場に残ったのは三人——いや、四人。

「爺、タカミチ。外せ」

「分かったわい。変な気を起こすでないぞ？」

「ではブレイズさん。いい夜を」

分かつてるから早く行けと意を籠めてブレイズは手を振り、残った人物を見遣った。

「よう。随分とイイ女になったな、真名」

少しずつ、焦れる程にゆつくりとブレイズへ歩み寄る彼女——真名の表情は、煌めく絹糸の様な髪に依って窺う事は出来ず。

漸く触れられる距離に近付いた二人。ブレイズは待ってましたとばかりに彼女の顎を掬い、その唇へ噛み付こうとした。

「トマトソースはコンビニでも買える。だから物騒なモノを下ろせ」

噛み付こうとしたのだが、額に押し付けられた固い感触に断念するしかなかった。下ろせと宣うブレイズに対し、真名は幾分寒気のある笑みを浮かべながら彼を睨んだ。

「今すぐトマトソースに舌鼓を”打ちたい”よ……だがその前に——何故か他の女の匂いがするんだ」

「ああ、此处に大勢女が居たからだ。恐らく匂いが混じったんだらう」

「他の女を抱いたんだね」

「ああ、一人が寂しくて人形を抱いて寝たんだ。恐らくそれと勘違いをしてるんだろう」

徐々に青ざめていくブレイズの表情。比例して真名の握る拳銃の引き金に掛かる指には、徐々に力が籠められていく。

そして漸く覚悟を決めたブレイズの額からは、気付けば銃口は姿を消していた。代わって視界に飛び込んだのは悪戯が成功した子供の笑み。

「刺激的な再会もいいかなと思ってね」

「刺激的な再会よりも、優しいキスがいいと思ったんだが」

そうして笑い合った二人は暫くの沈黙を置いた後に、噛み付く様にキスを交わしたのだった。

「——言わせてもらうが、俺は餓鬼のお守りなんざ御免だ。修業だ？ 笑わせるな。そんなに修業をしたけりゃ滝に打たれて滝壺で溺れて死ね」

皮肉混じりに宣ったブレイズの眼は笑えていなかった。見る者の背筋を凍らせ、心臓を驚掴みにするかの様な錯覚。ジワジワと潰される体。息を吐けば盛大な溜息に変わり、近衛門はしまったと咳ばらいを一度。

「野郎の餓鬼に用は無い。用があるのは女だけだ」

「……何を言うんじゃ」

目前に優雅に座るブレイズをどうしようも無い程に殴りたくなつた近衛門ではあるが、やはりか、盛大な溜息しか出てこない。

「とにかくだ。餓鬼の件は知らんが他は任せろ。俺がわざわざ此処に来た事には、恐らく何か意味があんだろ……神のみぞ知るってやつだ」

まるで他人事の様に告げるブレイズの眼は本気だ。

近衛門は仕方ないと彼が吸った煙草の成れの果てを見て頷いた。

「仕方ないの……まあネギ君ならこちらで何とか出来るじゃろ」

「出来る出来ないじゃないだろう。やるかやらないかだ。俺はやらない、お前はやる。それでいいだろ」

話は終わりだと立ち上がったブレイズは懷から煙草を取り出し火を着けた。そして有害な煙を撒き散らしながら、彼は残った面子を見向きもせず部屋を出て行った。

「困った男だわい」

「まああの人らしいと言えばあの人らしいですね」

「フン！ 変わってはいないな」

三者三様の反応を示すも、三人の顔には優しい笑みが零れていた。

4th However (前書き)

誤字脱字有り得るやも。展開とか中途半端やも。ただど気にしたら負けなんだ。やる時はやる、基本はそのStanceで。

4th However

やはりか、年頃の女の子というのは何時の時代も難しいとブレイズは溜息を零す。

着任してから早くも一週間が過ぎた。対した時間も経っていないかもしれないが、本人にとっては酷く長い。日曜の夜がこれ程迄に憂鬱だとは知らなかったとは彼の言葉。

朝陽を一身に受け、そんなに照らすな、照れるだろ——などと適当な事を宣い、所謂歩き煙草をしながら学園の敷地内に無理矢理作った家を出た。

忙しくなる手前の朝が彼は好きだ。闇に沈む夜も好きだが、それ以上にこの緩い雰囲気が好きなのだ。

そんな上機嫌の彼がフラフラと怠そうに歩いていれば、愉快的仲間を発見してしまった。

「おはよう、千雨」

「恥ずかしいから名前で呼ぶな……おはよう」

フランクな喋りで千雨——長谷川千雨はブレイズを睨んだ。

彼が着任して以来、毎日朝方一番に遭遇するのは彼女だった。何故かは彼にも分からないが別に気にも留めない。

「また眼鏡を……いい加減外すんだ」

「朝から馬鹿野郎、眼鏡返せ」

そしてこの小学生染みたやり取りも既に日課と化していた。

「俺は千雨の素顔が見たいだけだ」

何時もの様に言い放ったブレイズに千雨は照れ臭そうに頬を掻いた。そして一瞬の隙を逃さない彼は彼女の頬に優しいキスを。

「これで素晴らしい一日が始まった」

「……」

千雨としては余りこういった行為はして欲しくない、いや、断じて止めて頂きたい。初回こそ格闘ゲーム並のラッシュをプレゼントしたが、それでも尚しつこい彼に諦めた。唇でないだけまだマシだと。

「ふざけやがって」

「どうした？ 本物のキスがいいか？」

「瞬間クロス」

千雨としてはブレイズに会わないように時間をずらしたり道を変えたりしてもいいのだが、如何せん彼に負けた気がして嫌だった。それと心の何処かで彼に会いたいという想いが在るのも事実。

非常識極まるこの学園内で、よっぽど常識極まるこの餓鬼みたいな触れ合いが、彼女にとってのストレス解消の手段の一つに成り上がった故。

「さあ、行くぞ、千雨」

一瞥をくれた後、しっかりと歩きだすブレイズの背中が好きだったりする自分が、本当は変態なのではないかと、千雨は自己評価をしていた。

適当に見付けたベンチに、ブレイズは英紙と珈琲片手に座り、担当の授業が無いこのささやかな時間を楽しんでいた。

——あの五月蠅いクラスから離れると、自分が歳を喰った事を実感する。

新聞を眺めながらしみじみと思った。

自分が若い頃はもつと羽目を外していた。平和ではない羽目ではあったが。しかしながらやはり年齢には勝てないと、苦い珈琲を啜り、先程から感じていた気配に向け声を掛けた。

「火イ貸せ」

「——本当、敵いませんね」

苦笑を浮かべながらしっかりと現れたタカミチはブレイズの煙草に火を燈した。

「年期が違う。そういえば一週間過ごして俺なりに思うところがあるんだが、答える」

はいと一度だけ返事をし、偉大な先輩の隣に肩を並べる様に座った。タカミチはほんの少しだけ、尊敬する人に並んだ事に笑みを零した。

「未だ関わってはいないが、アスナはどうなんだ？」

——いきなりその話ですが。

タカミチは今度も苦笑を零した。

昔の日々を思い返せば、件の少女が一番懐いていたのは鼻肩目等を抜きにしてブレイズだった。何をするにも何処に行くにも金魚の糞よろしく彼の後ろから決して離れなかった。ちなみに positioning は彼の膝の上、勿論スタメン、不動のレギュラーであった。

「元気にやってます。毎朝新聞配達バイトをして、自分の事を自分でしようという姿勢は、私自身見習わなければなりません」

「なら、いい……」

新聞を閉じて白煙を零したブレイズは、感慨深そうに瞼を閉じた。

出会いは忘れてしまいそうな程に昔。ただ覚えているのは、あの綺麗な色をした瞳。

「お兄ちゃん……綺麗な眼」

「そうか？ 君が言うのならそれは綺麗なんだろう。かく言う君の瞳も綺麗な」

そういえば表情こそ変化が見られないが、随分と柔らかな空気になった。

「……ありがとう」

「本当の事さ。アア、忘れてた。俺は■■■■、君の名前を教えてくださいませんか？」

「■■■■……私は■■■■」

「そうか、随分といい名前だ。覚えるよう善処する事を考えよう」

男は困った様に、しかし優しく笑った。

少女が訳が分からないと首を傾げれば、男は右手を少女に伸ばし、戸惑った後に左手で小さな頭を撫で回した。

「■■■■。君はきっと将来美人になる。何たって俺のジョークを笑わないなんて大層な美人にしか出来やしないんだからな」

そう言って笑った男に、少女は戸惑いながらも纏う空気をより一層柔らかいモノに変えたのだった。

「——誰だろ」

神楽坂明日菜は全く訳の分からない夢を見た。懐かしく感じられた夢。随分と眩しい男。思い出すのは金髪。暗闇ですらもまばゆく照らす金の輝き。

全く以って訳の分からない夢に首を傾げるも、今日は寝起きから調子が良い事に考えない事にした。

ただ、不意に自分の頭を撫でてみれば、誰かの大きな左手を思い出した。

「……あのクラスの連中だが、一般的な人間よりも内包する魔力が多いな。まあ毛が生えた様なモンだが、異常だ」

——スナイパーも忍者も居るし。

回想を止め、疲れた様に自分の担当するクラスの愚痴を零す。遠回しになんてクラスだとブレイズは言いたいのだろう。その真意に気付いたタカミチは申し訳ないと思いつつも学園長のせいにした。

「まあいい。退屈はしなさそうだ。ただ、あの年齢だと本契約しづらい」

後半に宣ったブレイズの冗談の様な言葉に、タカミチは冷や汗をかきながら、きつと本気で言ってるんだと焦りを覚えた。

その焦りに気付いた彼は笑いながらタカミチに言った。

「安心しろ。本契約なんてしないさ、多分。それに、仮契約をして唾を付けとこうなんて思っちゃいけない、少しな。それに、全員と関係を持つなんて事は有り得ない、恐らく」

——嘘だッ！

タカミチは無性に煙草が吸いたくなった。

タカミチとの有意義な触れ合いを終えたブレイズは、フラフラと怠そうに学園内を闊歩していた。下校時間は遙か昔。今は殆ど学生を見受けないこの学園は不気味でいて、だが彼にとって嫌なものではなかった。

夕陽と夜が混ざった紫色は美しく空に栄えた。

「——ッ！」

ふとブレイズの耳に届いた悲鳴。悪魔だとかいった魔法の匂いがない悲鳴。届いてしまった悲鳴に彼は心で小さな悲鳴を。

——聞いちまった。だが、展開次第。うん、そうしたい。

普通の先生という役職に従事する者なれば、何かと真相を見に行くだろう。だが彼はそういった事をしようとは思わない、面倒だから。

「——離して！」

——聞いちまった。

思わず彼は顔を手で覆った。次いで甘ったるい漫画や小説の様な展開に期待もした。

——頂くでしょう。

舌なめずりをした彼は寧猛だった。

「離して！」

「いいじゃねえか。俺等とイイ事しようぜ？」

ツインテールが揺れる少女を取り囲む男の姿は五つ。

無理に振り払おうと少女は試みるものの、軟派だとは言えやはり男。力で抗う筈もなく、男の成すがままに。

「オイオイ、兄ちゃん。ナンパは御法度だ」

そんな六つの人影の中に異質な男が一人割って入った。揺れる金髪に鋭い目付き。口角を上げ、歪んだ笑みを携えた男。

「ブレイズ、先生……」

少女は安心したように、だが少しだけ不安そうに呟いた。
先生という言葉に食いついたのは男達。

「先生？　んな成りした先生様がどうしたんですかー？」

「――口を慎めよ、糞餓鬼」

ブレイズの沸点は究極に低かった。
少女を捕まえている男の腕を無造作に掴み、捻り上げ、容易に折ってみせた。

「糞餓鬼、いいか、糞餓鬼。ナンパなり何なり好きな事をすりゃいい。だが、俺をナメんな。瞬間殺す」

宣いながらブレイズは腕を折ってやった男を無造作に蹴り飛ばした。男は既に意識は無い。

「今すぐ失せ――何だ、帰ったか」

埃を払い、煙草に火を点けてみれば男達の姿は無かった。特に言及するでもなく、その存在すら煙草の煙に溶けて消えた。
そして振り返り、ツインテールの少女を漸く視界に納めた彼は、少女の名を呟いた。

「アスナ、怪我はしてないか？」

言いながら左手で頭を撫でれば、少女——明日菜は振り払う事もせず、ブレイズの顔を見て首を傾けた。

「昔、先生に会った事ない？」

「いや、初対面だが……成る程。アスナはそうやって男に声を掛けるのか、上手いな」

素っ頓狂なブレイズの解答に、明日菜は顔を赤くしながら否と叫ぶ。

「アア、忘れてた。俺はブレイズ、改めて君の名前を教えてくれるか？」

「……神楽坂明日菜」

「アスナ、いい名前だ。しっかりと覚えられそうだ」

突然の自己紹介に流されて自身の名前を告げれば、ブレイズは再度左手で明日菜の頭を撫で回した。

思い出すには簡単だが、それは遥か昔の記憶。

「綺麗な瞳……」

「アスナが言うんならそれはきっと綺麗なんだろうな。かく言う君の瞳も随分と綺麗な」

何かを思い出しそうだったアスナの瞳は既に黒に染まった夜闇を

映し、ブレイズは彼女の瞳から眼を決して離す事はしなかった。

右眼の空色と左眼の紺色。晴れ渡った空と夜が沈む空。橙色の髪は暁を彷彿とさせる。

ブレイズは煙草を吸いながら明日菜を考えていた。自身が想像した通り美少女になったと。

——きっと彼女の頭に付いた鈴は朝が始まる合図だ。
大して上手くもない言い回しに調子を狂わしながらゆっくりと夜を進む。

「……」

過酷な運命を背負った少女は過去を失い今を生きていた。その姿に泣きそうになった。明日菜の空にはブレイズという存在は既にかつた。

「もう膝に座る事もないか。座ったなら座ったでやる事は一つだがな」

笑って煙草を弾いたブレイズは再度明日菜の瞳を思い出す。

「天空の原初神、A i t h e r……空を統べるならば——」

言い得て妙だと笑い、気付けば明日菜を一人の女性として見ている自分がいたのだった。

明日菜は一人、ベッドの上で布団に包まりながらブレイズの瞳と左手を思い出した。

金色に輝く髪はどんなに暗かろうとも眩しい程に輝いていた。

碧い瞳は酷く澄んで、その海の奥底には微かな焰が見え隠れしていた。

彼の左手は暖かく、奇妙な安心感を得た。

「不思議な人だったな……」

まさか自分が甘ったるい漫画や小説の様な展開に巻き込まれ、白馬の王子とは似ても似つかない男が現れた夕闇の出来事。

「随分と碧かったわね」

——知ってるか。海の色が青いのは、空が青いからなんだ。

子供っぽく笑いながら語る金髪を思い出した。だが、肝心な顔は靄がかかった様に思い出せない。

「まあ、いいか」

呟いて寝ようとする明日菜。彼女の瞼の裏には今日の金髪が思い出され、何故か気持ちよく寝れると思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8611i/>

Ships and Stars

2010年10月16日14時14分発行